

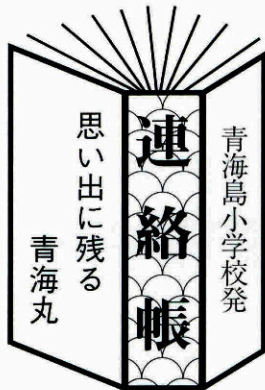


宮本 諒子 さん

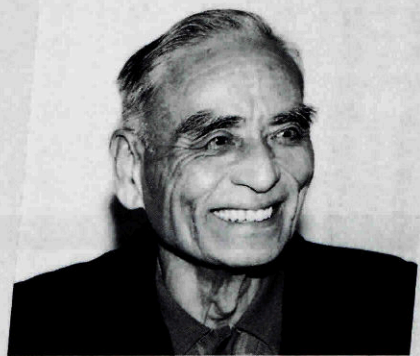
6年 (青海区)

「わあっ、動いてるよ」
 今日、みんなの家の人たちと水産高校の船に乗って、青海島の周りを船でUターンします。船が、ぐんぐん進んで行きま
 す。青海丸は、波をかき分けて進んでいるみたいだったので、さながら、大名行列みたいだと思
 いました。

周りの景色が見えた時、青海島
 島って、いろんな姿をしているんだなあと、感動しました。美しい海や、とてもりっぱな岩々
 など、こんな所もあったのかと



驚きました。
 帰りに、お父さんから、「あんな大きな船に乗れたなんて、すごいことなんだよ。」ということ聞いて、うれしくなりました。
 本当に貴重な体験をさせてくださった、ありがとうございます。六年生の大切な思い出になりました。



た。平成元年に妻を亡くし、今は一人暮らし。「何から何まで自分でしなければならぬし、特に食事の仕度が大変ですね」と笑う。

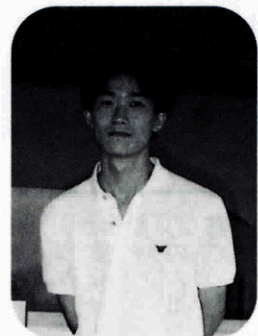
若い頃から酒は強く、一升はかるかった。去年、胃の手術をするまでは晩酌3合、今でも焼酎1合に酒5勺という。「酒は辛口、刺身は別になくても豆腐が一丁あれば。豆腐は酒によく合いますよ」と。今まで、ほとんど二日酔いになったこともない。集まりで飲み会があるときは、得意の「支那の夜」を映画説明をしながら唄うそうで、(一節聞かせて下さい)「赤いランタン波間にゆれて……」と名調子を披露。

これからの夢は、「自分の車で、気ままに温泉をめぐるって、一杯飲みながら旅をすることです」

ふるさとながと ②1

こんにちば

経済 ※パラノ・シテイを越えて



原田 崇史 さん
(神奈川県川崎市)

昭和45年三の瀬区に生まれる。
 平成元年大津高校卒業後、慶応義塾大学法学部を経て現在同大学院法学研究科(修士課程)に在学中。

略歴

大学進学のため長門市を出てから7年近い日々が過ぎようとしている。その間、休暇の折りに帰省する度に、長門という一個の町が少しづつではあるが着実に発展しているのを感じ、密かな喜びを感じる。

しかし、経済的發展の裏で文化的側面の立ち遅れに苛立ちを覚えるのもまた事実である。

確かに、金子みすゞや近松門左衛門の伝承には近年、目を見張るものがある。だが、それ以上に、個々の市民がその多様な好奇心を満足できる環境の整備こそが重要であるとはいえないか。

市民の文化的需要がある一方で、それへの行政側の対応は必ずしも十分なものとはいえない。町の文化的空洞化を抑制し、自然と文化と経済の調和点を探る



図書館風景